

福岡大学病院産婦人科における当直翌日を 正午までの半日勤務とする試み

城田 京子 辻岡 寛 小浜 大嗣
堀内 新司 井上 善仁 江本 精
 瓦林達比古

福岡大学産婦人科

要旨：[目的]産婦人科は特に夜間の仕事量が多いことから敬遠され、産婦人科医の減少が社会問題になっている。したがって、このような労働環境を改善するために、我々は「当直翌日は正午までに終業する」試みを行った。[方法]10カ月間、調査票を用いて当直日の夜間の就労状況と、その翌日の終業時間を調査した。[結果]当直中に「眠ることができた」のは半数で、「細切れに眠れた」と、「仮眠程度」もしくは「一睡もできなかった」が残りを二分した。一睡もできなかった場合に限り、3割の当直医が早めに終業し、平均終業時間は17時36分であった。主治医を担当する医師のほとんどが、午後にも担当患者の手術・出産・処置などがあり、主治医を担当しないスタッフでは、3割が臨床業務以外の会議を、終業できない理由とした。[結論]今回の試みでは絶対的人材不足により、当直翌日の業務を1時間短縮するのが限界であった。しかし、今回の試行を足がかりに、業務緩和に関わることを可能なことから実行していく必要があると考えられた。

キーワード：当直翌日の勤務，労働環境，大学病院の産婦人科医，医師不足